児童によるFM活動を通した学習計画の立案が学習動機づけに及ぼす影響（1）

○川中紫音（横浜国立大学大学院）
佐久間賢志＃（朝日塾小学校）
高本真寛（横浜国立大学）
中村美祐希（横浜国立大学大学院）
吉井 毅＃（江戸川学園取手小学校）

キーワード：フューチャーマッピング，学習動機づけ，セルフ・コントロール

問題と目的

本研究の目的は，児童を対象としたフューチャーマッピング活動(山あり谷ありの「幸福度曲線」を描き,実際の行動計画の立案を行う活動。以下，FM活動とする）の実践効果について検討することであった。

方　法

調査対象者

A県のX小学校及びB県のY小学校の小学生を対象に，学校長の許可を得てFM活動を実施し，FM活動実施前後の 2 回実施した調査票へ回答した136名（A小学校：73名，男性36名，女性36名，不明1名；T小学校；63名，男性39名，女性24名）を分析対象とした。また，本研究は，FM活動を実施する群と実施しない群をランダムに割り当て実施した。それぞれの小学校における FM 実施の有無の人数構成はTable 1の通りである。

Table 1　FM活動の実施の有無に係る人数構成

	実施群	未実施群	計
X小学校	48	25	73
Y小学校	20	43	63
計	68	68	136

使用尺度

本研究では，FM活動の実施直前および約1ヵ月後に，自律的学習動機尺度（西村他，2011）と児童の self-control 尺度（庄司，1993）への回答を求めた。なお,それぞれ回答は4件法で求めた。

結果と考察

まず，FM活動の実施群と未実施群との間で学習動機づけやセルフ・コントロールの得点の変化に相違が見られるかを検討するために，実践前後の各指標における変化量得点を算出した(Table 2)。得点化は，実践後の得点から実践前の得点を減じて行った。したがって，変化量得点が正の値は実践によって得点が高くなったことを示し，負の値は実践によって得点が低くなったことを示す。この変化量得点を従属変数として，FM活動の実施の有無を条件とした対応のない t 検定を行った。その結果，両群の得点に統計的に有意な差は見られなかった（ts = 0.32-1.02，$n.s.$）。よって，FM活動によって児童の学習動機づけやセルフ・コントロールが高くなるといった実践的効果は認められなかった。

次に，活動の前後における変化量得点と活動の振り返りに関する3項目（「見直し頻度」，「『タイトル』の達成度」，「『まずすること』の達成度」）の相関係数を算出した。その結果，「『タイトル』の達成度の評価」および「『まずすること』の達成度の評価」は内的調整（r =.270,.260，p <.05）取り入れ的調整（r =.258,.258，p <.05）セルフ・コントロール（r =.321,.272，p <.05）との間に有意な正の相関が見られた。

以上の結果から，すべての児童に対して FM 活動が効果的な実践とは言えないが，児童が書いたFMを達成できたと評価するほど，学習動機づけやセルフ・コントロールが高くなる傾向にあることが明らかにされた。したがって，児童がFMに書いたことを達成できるよう，教師がどのような支援をするかが重要であることが示唆された。

付　記

本研究の実施に際し，アルマクリエイション株式会社に協力いただいた。

Table 2　FM活動の実施の有無における記述統計量

	未実施群		実施群		t
	M	SD	M	SD	
内的調整	0.07	0.38	0.02	0.43	0.69
同一化的調整	0.02	0.35	-0.05	0.46	1.02
取り入れ的調整	0.01	0.56	0.04	0.51	0.32
外的調整	0.06	0.60	0.11	0.58	0.49
セルフ・コントロール	0.04	0.27	0.01	0.23	0.73